

## 第十一章 土地の地代——その性質と形成（十一）

### 過去四世紀における銀価の変動に関する補論

改良の進展は三種の粗生産物に異なる影響を与える

#### 第三類

改良の進歩に伴って値上がりしやすい粗生産物の第三（最後）の類型は、供給を増やすための人為的手段の効果が限られるか、その結果が不確かなものである。したがって実質価格は概して上向くが、供給拡大の成否は種々の偶然に左右され、ある段階では値下がりし、別の段階では横ばいとどまり、同じ時期でも上昇の程度に差が生じる。

自然の仕組みにより、粗生産物の中には他の産物に付随してしか得られず、その供給量が対応する産物の量によって事実上制約されるものがある。たとえば羊毛や原皮の供給は、その国で維持される大小家畜の頭数に依存し、この頭数は国の改良の段階と農業のあり方によって決まる。

改良が進むにつれて精肉が高騰するのと同じ要因が羊毛や原皮にも及び、価格もほぼ

同率で上がると考えられがちだが、それが成り立つのは改良の初期に後者の市場が前者と同程度に狭かった場合に限られる。現実には、両者の市場規模は通常、大きく隔たっている。

精肉の市場は多くの場合、生産国内に限られる。例外として、アイルランドと英領アメリカの一部は塩蔵食肉の大規模取引で知られ、自国産の精肉を相当量海外に輸出する国は、この二地域のほかにはほとんどない。

これに反して、羊毛と原皮の市場は、改良の初期段階から生産国内にとどまりにくい。羊毛は無加工のまま、原皮も軽い下処理だけで遠隔地へ運べ、しかも多様な製造業の基材であるため、国内需要が乏しくても他国の産業が需要を生み出す。

耕作が進まず人口がまばらな国では、羊毛や原皮（皮革）が家畜の総価に占める割合は、改良が進み人口が増え食肉需要が強い国よりはるかに大きい。ヒューム氏によれば、サクソン時代には羊のフリースの価値が一頭の五分の二と見積もられ、現代の比率を大きく上回っていた。スペインの一部では、羊毛（フリース）と獣脂だけを目標てに羊を屠り、胴体は土に埋めて腐らせるか、猛獣や猛禽の餌にする例すらある。スペインでさえ時にそうであるなら、チリやブエノスアイレス、さらにスペイン領アメリカの多くの

地域では、牛皮と獣脂だけを目的に牛を屠るのがほとんど常態である。同様の状況はブカニア（海賊）が跋扈した頃のイスパニョーラ島にも見られ、のちに島西半の沿岸ほぼ全域に広がったフランス人植民地が定住と改良を進め人口が増えるまで、スペイン側の牛にはほとんど価値が付かなかった。なお、スペイン側は今も東岸だけでなく、内陸および山地全域を保持している。

改良と人口増に伴い、家畜一頭の価格は上がるが、上昇幅は羊毛や原皮よりも食肉（枝肉）に大きく表れる。社会が未熟な段階では食肉の市場は生産国内にとどまるため、その国の改良と人口拡大に応じて着実に広がる。他方、羊毛と原皮は開発途上の国でも世界の商取引に乗りやすく、一国の発展と同じ比率では市場が拡大しにくい。世界の取引環境は特定の一国の改善では大きくは変わらないので、これら原料の市場は改善前後でほぼ不変にとどまることすらある。それでも一般には多少は広がり、とくに国内でこれらを用いる製造業が育てば、取引の場が産地の近くへ移り、長距離輸送費が不要になる分だけ原料価格が押し上げられる場合がある。したがって羊毛と原皮の価格は食肉ほど大きくは伸びないにせよ自然に上向き、少なくとも下落はしにくい。

英国では毛織物業が盛んであるにもかかわらず、英羊毛の価格はエドワード三世の時

代以来大きく下がってきた。確かな記録によれば、同王の治世（十四世紀中葉、約一三三九年）には、英羊毛一トッド（二十八ポンド）の「中庸で妥当な」価格は少なくとも十シリングで、これはタワー衡銀六オンス（一オンス＝二十ペンス）に当たり、現在の貨幣で約三十シリング相当であった。現在では、非常に質の良い英羊毛でも一トッド二十一シリングなら「良い値」とされる。ゆえに名目価格の比はエドワード三世期と現在で十対七となる。実質面の差はさらに大きい。当時は小麦がクォーター（八ブッシェル）六シリング八ペンスで、十シリングで十二ブッシェル買えたが、今日は一クォーター二十八シリングのため、二十一シリングで六ブッシェルしか買えない。よって実質価格の比は十二対六、すなわち二対一であり、当時の一トッドの羊毛は現在の二倍の生活必需品を買い、実質賃金と同じと仮定すれば、雇える労働量も二倍であったことになる。

英羊毛の実質・名目の下落は自然ではなく、強権的政策の所産である。すなわち、イングランドからの羊毛輸出は全面的に禁止され、スペイン産羊毛の無税輸入が許可され、さらにアイルランドからはイングランド以外への羊毛輸出が禁じられた。これにより、改良の進展にもかかわらず本来拡大すべき英羊毛の市場は国内に押し込められ、そこへ

他国産羊毛が流入し、アイルランド産も同一市場で競争を強いられた。しかも「公正」の名の下にアイルランドの毛織業は最大限抑制され、同国が国内で加工できる自国羊毛はごく一部に限られるため、許された唯一の販路であるグレートブリテンへ、より多くの原毛を送らざるを得なくなった。

古い時代の生皮価格は、羊毛のように王室賦課の評価から推測する手掛かりが乏しいが、フリートウッドの記録によれば、一四二五年にオックスフォード州バーセスター修道院で交わされた勘定に具体的価格が示されている。すなわち、去勢牛皮五枚が十二シリング、牝牛皮五枚が七シリング三ペンス、二年物羊皮三十六枚が九シリング、子牛皮十六枚が二シリングである。当時の十二シリングは現在価値で二十四シリングに当たり、牛皮一枚は現在の貨幣で約四シリング十ペンス相当の銀価値となるから、名目では昔の方が安い。他方、実質で見ると結論は逆になる。当時の小麦は一クォーター（八ブッシェル）六シリング八ペンスで、十二シリングあれば十四と五分の四ブッシェルを買え、これを現在の相場（一ブッシェル＝三シリング六ペンス）で評価すると五十一シリング四ペンスになる。牛皮一枚（五分の一）に引き直せば、現在の十シリング三ペンスに相当する購買力である。当時は家畜が冬季にやせ細っていたため体格は大きくなかったは

ずだが、今でも重さ四ストーン（一ストーン＝十六ポンド）の牛皮は悪くない品とされ、当時なら上物扱いだろう。現在（一七七三年二月）の相場で一ストーン＝半クラウン（二シリング六ペンス）とすれば、その皮は十シリング程度になる。したがって、名目価格は現在の方が高いが、実質価格、すなわち生活財や労働に対する購買力はむしろやや低い。なお、牝牛皮の価格は去勢牛皮との比率としてほぼ一般的で、羊皮が高めなのは羊毛付きで売られたためと思われる。子牛皮が著しく安いのは、家畜価格が低い国では群れ維持の対象外の子牛を早期に屠って乳を節約する（二十～三十年前のスコットランドがそうであった）ため、子牛皮の利用価値が乏しくなるからである。

近年と比べ、生皮の価格は目に見えて下がっている。主因は、アザラシ皮の関税撤廃と、一七六九年に実施されたアイルランドおよび植民地産生皮の五年間の無税輸入である。ただし、十八世紀全体の平均で見れば、実質価格は古代よりやや高めだった可能性が高い。生皮は羊毛ほど遠距離輸送に適さず、保存にも弱い。塩蔵すると品質が落ち値も下がるため、国内で加工できず輸出に頼る国の相場は下押しされ、製造業を持つ国の相場は相対的に押し上げられる。要するに、非工業の国では安く、工業国では高くなりやすく、時代でいえば古代は低く、近世は高い傾向を示す。制度面でも、皮なめし業は

毛織業のように「国家の安全」と「当業の繁栄」を結びつけて政府の支援を引き出すことができず、優遇は薄かった。生皮の輸出は禁圧され「有害」視される一方、輸入には関税が課された（アイルランドと植民地産は五年のみ免税）。それでも、アイルランドの余剰生皮の販路はグレートブリテンに限定されておらず、植民地でも普通牛皮が本国送り限定の列挙品目に加えられたのはごく近年のことである。よって、少なくともこの件について、英製造業保護のためにアイルランド通商が体系的に抑圧されてきたとは言い難い。

羊毛や生皮の価格を自然水準より低く抑える規制は、改良・耕作が進んだ国では食肉の値上がり招く。改良地で飼養される牛や羊の価格は、地代と通常利潤を賄える総額で決まり、羊毛や生皮で回収できない分は枝肉に上乘せされるからである。総収入が確保される限り内訳は本質ではないため、生産者としての地主や農民の利害は大きくは動かず、むしろ生活物資の高騰という消費者としての不利益が問題となる。他方、未改良・未耕作の国では事情が一変する。多くの土地は放牧以外に使えず、家畜価値の核が羊毛と生皮であるため、これらが下がっても枝肉は高くない。供給も需要も動かず、結果として家畜全体の価格が下落し、家畜生産に依存する多くの土地で地代と利潤

がともに縮む。この観点から、しばしばエドワード三世に（誤って）帰される「羊毛輸出の恒久禁止」は、当時の国情では極めて有害で、王国の広大な土地価値を削り、小家畜の価格を押し下げ、以後の改良を著しく遅らせたはずである。

イングランドとの連合により、スコットランド産羊毛は欧州の広域市場から締め出され、販路がグレートブリテンという限定的な市場に閉じ込められた結果、価格は大幅に下落した。とはいえ、羊の飼養が盛んな南部では、羊毛安の打撃は食肉価格の上昇が完全に埋め合わせ、土地価値の深刻な毀損は避けられた。

羊毛や生皮の量を増やすうえでの人為の効果は、国内産出に依存する部分では限界があり、海外産出に頼る部分では不確かである。決め手は相手国の総生産そのものではなく、国内で未加工のまま原料としてどれだけ残すか、ならびにこの種の原料輸出にどれほど規制を課すかという点であり、いずれも自国の産業努力とは無関係の外生的要因である。ゆえに、この種の粗原料の増産に対する人為の効き目は、限定的であると同時に当てにならない。

市場に供される魚という粗生産物の増産には地理的な上限があり、先行きも不確かである。海への距離、湖や川の数と分布、水域の豊凶が基本的制約となる。他方、人口増



と土地・労働の年次産出の拡大により需要は広がり、買い手の購買力も厚くなるが、狭い市場から広い市場へ拡張すると、供給に要する労働は単純比例を超えて増えがちである。年千トンの市場が一万トンを求める段では、漁場は遠のき、船は大型化し、装備は高額化して、必要労働はしばしば十倍超に膨らむ。ゆえに、この商品の実質価格は改良の進展とともに上がりやすく、実際、各国で程度の差こそあれ上昇してきた。

一日の漁は不確実でも、国の地勢を所与とすれば、年次や数年で見た市場への供給力はおおむね見通せる。ただし、その供給力は富や産業の発達より地理に強く依存するため、国が異なれば改良段階が違っても同程度になり得る一方、同じ時期でも大きく隔たることがある。したがって、改良の進展との連動は確かではなく、ここで言う不確実性とはこの不確かさを指す。

地中から得られる鉱物や金属、ことに貴重なものの増産については、産業の働きは上限で律されるというより、全体としてきわめて不確かである。

ある国に行き渡る貴金属の量は、自国鉱山の肥沃・不毛といった立地条件に必ずしも縛られない。鉱山を持たない国でも貴金属が潤沢に集積する例は少なくない。各国の保有量を左右する主因は概して二つである。第一に、産業の発達度と土地・労働の年次産

出が裏づける購買力であり、これが自国・他国の鉾山から金銀といった奢侈品を取り寄せるために割ける労働や生計の余力を定める。第二に、その時々に通商世界へ金銀を供給している鉾山の豊凶である。金銀は小型で価値密度が高く、輸送が容易かつ低廉であるため、鉾山から遠い国の保有量もこの豊凶に影響される。ゆえに、中国やインドスタンの保有量も、アメリカ大陸の鉾山の豊産・凶作に少なからず左右されてきたはずである。

これらの金属の保有量が第一の要因である購買力に依存する限り、その実質価格は他の贅沢品や不要不急品と同様に、国の富と改良が進むほど上がり、貧困や停滞が強まるほど下がる。すなわち、余剰の労働力と生活資源を多く持つ国は、そうでない国より、一定量の貴金属を得るために、より多くの労働や生活資源を支払うことができる。

各国の保有量が第二の要因、すなわち世界の市場に金銀を供給する鉾山の豊凶に左右される限り、実質価格（その金属で買える労働や生活必需品の量）は、産出が豊かなほどその程度に应じて下がり、乏しいほどその程度に应じて上がる。

通商世界に金銀を供給する鉾山の豊凶は、特定の国の産業水準とも世界全体の水準とも必然的には結び付かない。技術や商業が広がれば探鉾の範囲は広がり発見の機会はい

くらか増えるが、枯渇した旧鉱床に代わる新鉱床の発見は本質的に不確実で、手掛かりは当てにならず、掘り当てて操業が軌道に乗るまで価値どころか存在さえ確かめられない。この探索には成功にも失望にも上限がない。今後一、二世紀のあいだに史上最良を上回る鉱床が見つかることもあれば、当代随一とされた鉱山がアメリカ鉱山発見以前のどの鉱山より貧しいと判明すること、同程度に起こり得る。しかし、どちらに転んでも世界の実質的な富や繁栄（毎年の土地と労働の産出）にはほとんど影響しない。変わるのとは名目値（金銀で示される量）だけで、実質値（それで買える労働量）は同じである。極端に言えば、一シリングがいまの一ペニー分の労働しか表さなくなっても、あるいは一ペニーがいまの一シリング分を表すようになっても、手元の貨幣の実質的な豊かさ変わらない。世界が得る実利は、金銀器が安く豊富になるか、高価で稀少になるかという、ささやかな贅沢品の動向に限られる。